

空間的位置の指示と「主観化」 —認知言語学と現象学の交差するところ—

宮原勇

哲学者たちにとって、「客観として世界の中にある主観性」(Subjektivität in der Welt als Objekt)と、「世界に対する意識主観」(für die Welt Bewußtseinssubjekt)との相互関係のうちにこそ、それがいかにして可能かということを理解せねばならない理論的問題が存しているのである」(E.フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』S.184)

0. はじめに

本論文は、認知言語学者ラネカー(R.W. Langacker)の指摘している“subjectivity”や“subjectification”といった現象は、哲学的に見てどのように理解されるかを現象学の立場から検討することを目的とする。

われわれは世界の中で展開される事象を認識し、その事象を他者に対して語っている。この単純な事態を解明することは、きわめて複雑な要素を考慮せねばならない。まずは、われわれは世界の内部での出来事をどのように認識するのかが問題となる。いかにして感覚的経験を概念的枠組みでもって構造化し、統合するのか。一旦そのように認識された内容は、他者に対する伝達されるが、そのような認識内容がいかにして言語化されるのだろうか。認識内容が言語化され、伝達相手に対して発話される際には、認識内容そのものが発話されるということよりも、その発話の際の戦略、つまり、よりわかりやすく話す、より効率的に話すという戦略が働く。したがって、実際に発話された言語表現は、認識内容とは違っている可能性がある。言語化される以前の認識内容と、言語化されて発話された実際の言語表現とをどの

ように比較するのか。そもそもそのようなことが可能なのか。他者に向かって発話される表現以外にわれわれには何も手がかりは与えられていない。既に、聞き手に対する戦略が組み込まれている言語表現が与えられているのみなのである。とはいえ事柄としては、やはり<世界の内部の出来事をどのように認識するのか>という問いと、<それを他者にどのように伝えるか>という相互主観的場面についての問いとは区別せねばならない。方法的には、両者を区別して扱う必要がある。

現象学を創唱したフッサール(E. Husserl)は、前者の場面の解明、つまり事物の認識プロセスの解明に際しては、独我論的スタンスをとる。あくまでも個としての認識主観の内、様々な志向的働きが関与して一定の認識が成立するとする。つまり、「個」としての意識の内領域で機能する志向作用によって認識が成立するのであり、そしてその対象は意識の内領域を「超越している」(transcendent)ものと捉えられている。認識主観はそのような「超越的对象」を志向性の働きによって「構成」している。その意味ではわれわれは、「超越論的主観」ないしは「超越論的主観性」なのである。現象学の任務は、すべての現象、事象をそのような超越論的主観性の働きに帰着させること、つまり「現象学的還元」(the phenomenological reduction)を行うことに尽きる。

以上のような問題設定の下、他者との言語コミュニケーションの問題や他者の内面を知るという他者認識の問題は、認識の複雑性や階層性という視点で言えば高次元の問題、ないしは複合的問題と見なされうる。基本的にはHusserlでは、それらの問題は「相互主観性」(intersubjectivity)にまつわる問題として取り組まれている。相互主観性にまつわる問題系は、われわれが他者の内面をどのようにして知なのかという、他者認識の問題ばかりではない。われわれが生きている世界は、単に私のみ妥当する内容を持っているのではなく、他の人々と共有する文化や理論、社会組織などで満たされている。つまり、「われわれ」の世界を生きているのである。そのような世界は、個別的主観と一対一の関係にある主観的世界(像)ではなく、われわれにとって共通の場としての相互主観的世界である。他者認識の理論は、個人対個人の場面での感情移入、ないしは「自己投影」の理論であるが、われわれがそこで生きている、他者と共有している「客観的」世界の出現は、われわれがすべての他者との相互理解が成立して、はじめて可能となるというものではない。むしろ、「客観的世界」とは、それ自体、相互主観的世界であり、単なる個人的認識主観によって構成されるのではなく、相互主観性によって構成される「われわれの」世界なのである。そのような相互主観的世界があつて、はじめて他者認識が可能となる

のであり、相互主観的コミュニケーションが可能となるのである。その意味で相互主観的世界とは直接的認識の対象となるのではなく、あくまでも他者や文化的、社会的事象が成立し、それらをわれわれが認識する際に「地平」として、言い換えれば「場」として機能している基盤なのである。

以上のような認識を確認し、具体的な分析に移ることにしよう。

1. 主観化(subjectification)と主観性(subjectivity)

まず認知言語学で論じられている「主観化」(subjectification)なる現象を検討したい。

これから行う検討はつぎのような理論的な枠組みの下に行われる。

- i. 「主観性」(subjectivity)や「主観化」(subjectification)なる現象は、客観的事物関係が心的パスにより、内面化するという現象であるが、Grounding、つまり時間・空間内に於ける個体の同定にかかわる事象である。
- ii. 静態的事態の記述/描写の場合と動態的な出来事の記述/描写では事情が異なる。
- iii. Groundingという現象は、時空間内に対象や出来事を投錨させることであり、ある種の座標系を前提とする。[絶対的時間・空間座標を前提とした同定]
- iv. iiiにもかかわらず、Groundingは、客観的に展開されている座標系を前提しなくとも、ある基準点が設定されれば、そこから発する<方向付けのベクトル>によって特定がなされる。[相対的同定の可能性]
- v. 静態的な場合には基本的には、概念化者[認識者]である話者がivでいう「方向付け」(orientation)の基準として機能している。[相対的同定としての主観的同定]
- vi. 運動、ないしは移動が関係している動態的事態の記述の場合、運動性が含意されている構造物がある場合、さらに視覚や聴覚といった<擬似的>運動が想定される場合などは、vでいう概念化者を基準とせず、その運動に伴うベクトル自体が<方向付けのベクトル>となりうる。[個別的运动系による相対的同定の可能性]

2. 指示表現における概念化者の自己言及的表現の問題

まず、理論的枠組みのvの問題から始めよう。

ある言語表現が与えられているとしよう。その言語表現を行った発話者は、眼前に展開している事態(the state of affairs)を認知したのであるが、発話された言語表現の中には、そのような認知作用とその主体とが何らかの形で含意されている。つまり、発話者自体の存在も、潜在的にであれ、顕在的にであれ、その言語表現の中に含まれている。しかしそのモードは様々である。言語表現としては登場しないという仕方、示唆されているというあり方も認めるとすると、つねに意識され、表現されていると言ってよい。

この関係を「知覚」(perception)に於いて考える¹。

Sを観察者、あるいは自己(SELF)とし、Oは観察される対象(OBJECT)、ないしは他者(OTHER)とすると、「最適な視覚配置」(the optimal viewing arrangement)として下記のように観察者が、認識が向かっている地平(Horizon)に入ってこない配置状況が考えられている。

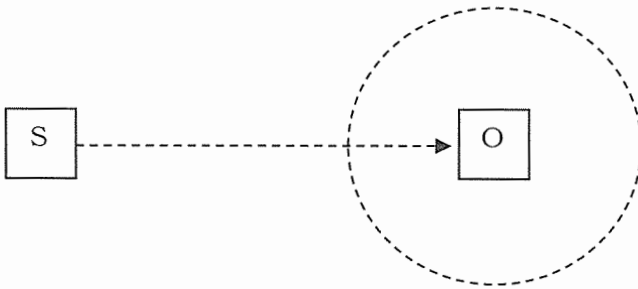


図 1

この構図は、観察対象Oの周りの明確さが最大となる領域と、その外にあってその対象を観察している観察者である「自己」、そしてその「自己」から出て対象に向かっている矢印、この場合は知覚という作用とからなっている。この知覚作用の状態が、知覚作用上の注意の及ぶ範囲、つまり「客観的状況」(the objective scene)が「観察対象Oの周りの明確さが最大となる領域」と重なる場合に、「最適」となる。このような「最適な視覚配置」においては、主観Sの注意がOのみに絞られて

いて、自己Sは知覚者としての自分を全く自覚していない、つまり自分自身は対象化されてはいなかった。そうする必要はなかったからである。言い換えると、Sが観察しているのは、「最適な視覚配置」を伴うOのみであり、<SがOを観察している>ということ自体は入っていないのである。この場合、話者の主観性は最大になっている。「主観性が最大化している」ということの意味は、ただ「一切対象化されていない」ということに過ぎない。概念化の対象とはなっていないということなのである。話者は、概念化者としてのみ機能している。ラネカーの表現によれば、話者は言語的描写の直接的状況の内部に入っていないということである。

それでは、概念化者でもある話者がどのような形で言語的描写の内部に登場してくるのであろうか。

ラネカーによれば、話者の「対象化」(objectification)は次のように行われる。

日常ありふれたこととして、知覚的關係や言語的描写において、概念化者の注意が、概念化者自身に向かうことがある。概念化者自身への眼差しによって、概念化者の有するGroundingの基準点がonstageになる、つまり「客観的情景」(the objective scene)内に登場することがある。あるいは、それが<offstageの参照点>として、言語的描写(predication)の「範囲」(scope)の内部に<潜在的に>含まれることがある。知覚作用が及ぶ「範囲」や言語的描写の「範囲」を「客観的情景」(the objective scene)と呼ぶが、それはパースペクティブ(perspective)という現象と関連している。ラネカーによれば、パースペクティブは、orientationとvantage pointという要素を有するとするが²、そのようなパースペクティブ構造を持つ視覚の焦点が当たる領野は、現象学の洞察によれば「地平」構造を持つ。それは<中心-周辺>という対概念により構造化されている。

現象学的に考えてみるとこうなろう。観察、つまり「知覚作用」の場合は、それ自体が意識活動であるから、たえず潜在的自己意識(latent self-awareness)が随伴している。意識作用は何ものかについての意識(aboutness)であるとともに絶えず自らに気づいているという状態にあるのが、意識というものなのである。consciousnessは常にself-consciousである。ただ、そのような意識は顕在的(patent)である必要はない。確かに、知覚という志向性と言語的描写とは、互いに相違している。知覚においては、今述べたように意識作用として必ず自分自身が意識されているが、言語的描写(predication)の場合、自分自身に言及がなされるか否かの二者択一性しかない。とはいえ、潜在的に方向付けの原点として「わたし」「ここ」「今」という要素が前

提されている場合がある。言語的描写には現れてこなくとも、それが前提されているのだ。

以上のように「最適な視覚配置」の拡大により概念化者の対象化が起こるのであるが、観察者、つまり話者が知覚作用の焦点が当たっている「舞台」に登場し、言語化される場合がある。それをラネカーは、「自我中心的視覚配置」(the egocentric viewing arrangement)内で話者の「対象化」(objectification)が起こる場合とする。それは、視覚の焦点が及ぶ範囲(「客観的状況」the objective scene)が、知覚的最適性の領域を超えて広がり、観察者や観察者の周りの直接的周囲領域をも含むような状況である。それは、groundingの基準点である概念化者が、onstageになる、つまり「舞台に出て来てしまう」状況である。具体的には、言語表現の内に、時空間内での個別的对象や出来事の特定の起点が、その言語行為の参与者を指し示す直示的表現によって設定される状況といえよう。

哲学的に見れば、個別的对象や個別の(個別化された)出来事を時間・空間という枠組みによって言語表現内で特定するには、原理的には発話という行為の瞬間の時間的位置(いま)と空間的位置(ここ)に依拠せざるを得ない。そして、その発話行為遂行者である「私」とその自己意識が、その時空間への投錨を保証している。この問題は、B. Russellがegocentric particularsと呼んだ*this, that, I, you, here, there, now, then, past, present, future*などの語に関わる。Russellは、これらすべての語は、結局*this*によって定義できるとしている。Russellの理論で注目したいのは、Iは、通時的実体を指す可能性があるので、I-nowという形で限定している点である。nowとは、Russellによれば、the time of thisという形で定義できるので、同定作用が行われる時点での<今現在の私>という意味で限定されている³。I-nowとは、まさにこのnow、フッサールではその「現在」は、無限なる「今」の時点から構成されている直線で表現できる時間が「客観的」、「相対的」時間であるのに対して、「絶対的現在」として規定されうる「今」なのである。その<絶対的現在>たる「今」に生きている「私」こそが、認識作用遂行の主体であり、発話主体としての遂行我(Vollzugsich)である。空間的には、その遂行我としての「私」は、I-nowでもあるが、またI-hereでもある。このI-hereが空間的配置の内に書き込まれる場合に、下記の図2のようにonstageの描写となる。

この図に対応する言語現象としては、はっきりと人称代名詞 *I* が使用されている文などを挙げることができよう。Groundingの要素として、人称代名詞*I*が使われていたり、話者自体の自己-記述が三人称で行われている場合は、話者の「対象化」(objectification)の度合いが高い場合といえる。

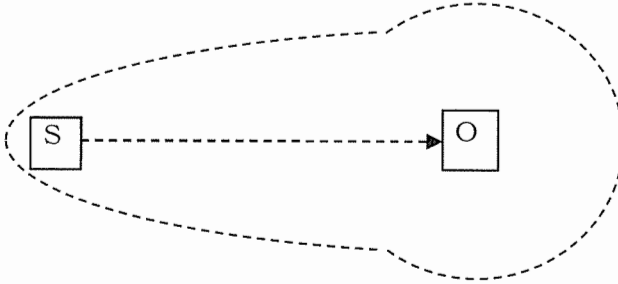


図 2

それに対して、話者の「対象化」の度合いが低い場合としては、下記のような表現を挙げることができる。

- (1) *An old church lies just over that hill.*
- (2) *There is a mailbox across the street.*

これらの例で使用されている前置詞overとかacrossなる事態を認識している知覚者(概念化者)=話者はステージに登っていない。つまり発話者自身がoverやacrossという前置詞で表現されている関係性の参照点となっているが、ことさらに表現されてはいない。Offstageであり、言語的述定の射程には入ってきていない。しかしながら、そのことが前提とされて、全体の位置的配置関係が認識されているのである。

3. メンタル・パスの生成としての「主観化」(Subjectification)⁴

(2)での前置詞acrossに関して言えば、実際にはなんらかの運動によって「通り」が横切られているわけではない。しかし、自分の立っている所からmailboxまで何かが運動をして道を横切っているのである。それは、「心のまなざし」が移動する

のである。ラネカーは、それをmental-pathと呼ぶ。それに対して、たとえば、次の(3)の例のような場合、実際の運動が起こっている。つまり、特定のtableという物体を横切って、その上をVanessaがジャンプした。この場合、acrossは、「複合的な非時間的な関係⁵」、つまり「同じトラジェクターとランドマークを含む一連の位置的配置」⁶を示している。

(3) *Vanessa jumped across the table.*

それを図に表すと次頁の図3の(a)になる。tという矢印で表現される時間を通じて、トラジェクター t_{tr} が、ランドマーク $1m$ に対しての位置関係を連続的に変化させ、開始時の側のランドマークから反対の側のランドマークまでのパス(path)を形成している。この文におけるacrossは、完全にgroundingの基礎となる「場」(ground)を発現させてはいない。図の中の記号では、Gである。この図でプロファイルされた関係は、対象と対象との間の「客観的軸」(the objective axis)のみである。他方、Groundingの基礎はoffstage、つまり舞台裏に姿を消して、言語的述定の射程の外にある。発話者と聞き手の役割は、最大限、主観的なものにとどまっていて、目の前の出来事をどのように見立てる(construal)のかという関係における「概念化者」の役割に限定されている。つまり、Groundingの基準となる点が、概念化者のポジションであり、その概念化の作用を図の(a)の破線の矢印は表現していて、それは空間的パスに沿って、様々な位置に応じてトラジェクターが変化する一連の場所的变化を描いているという。

次に下記の(4)のような文においては、図3の(b)に当たり、単純な非時間的な関係が表現されており、しかも実際には運動はなされていない。結局、(a)の移動における一連の場所的配置の最初と最後がプロファイルされていて、最初の点が、参照点R (reference-point)として機能し、最終点がターゲットとなっている。しかし、(4)の場合、最初の点は、Veronicaであり、それが参照点となっているだけであって、正確には移動の開始点ではない。とはいえ、破線の矢印の起点は、その参照点であるから、参照点から何か t_{tr} へと向かって進んでいるようにも見える。acrossという表現の本来持っている「何かを横切って」進むという運動、ないしは移動の含意が、(4)のような表現においても保持されていると言える。それは客観的な移動ではない。ラネカーは、(b)の参照点Rからトラジェクター t_{tr} までのパス上の動きを「主観的」(subjective)と呼ぶ。というのも、参照点との関係においてそのトラジェクタ

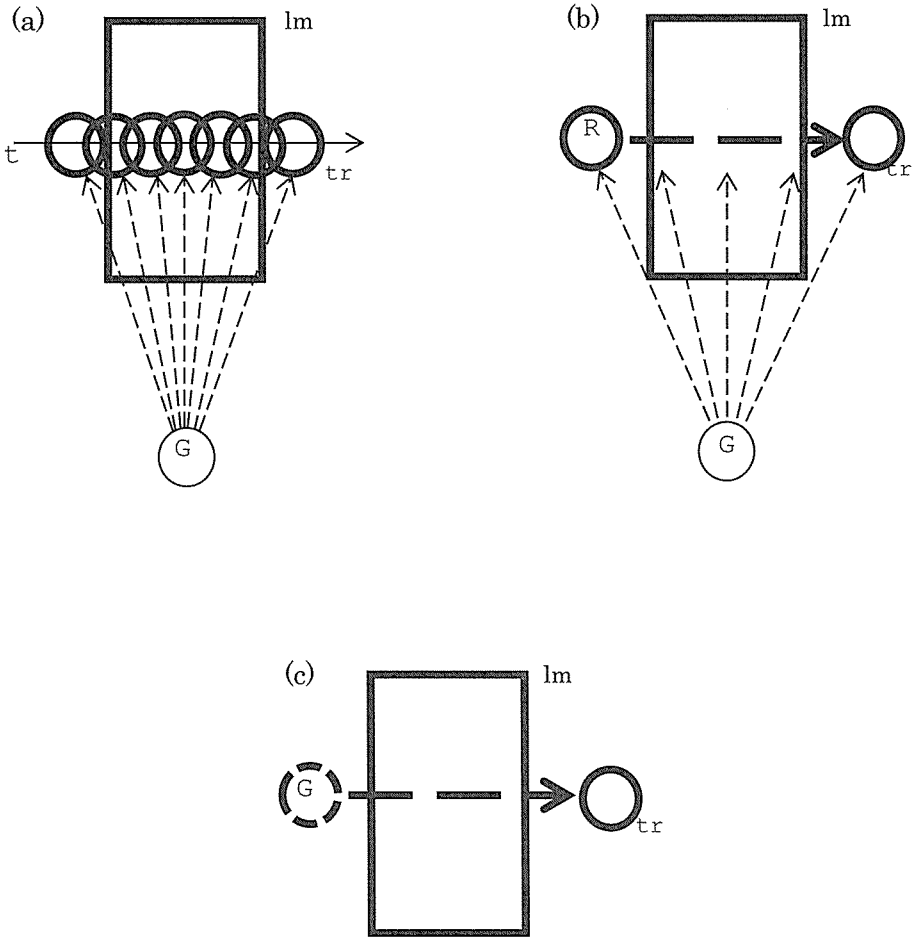


图 3

一を位置づけるために、心的にそのパスに沿って跡を辿っている概念化者に属しているからである。この「メンタル・スキャンニング」(mental scanning)は、主観的軸に沿って再編された関係性の表れであるという。そして、このような現象、つまりもともと実際の事物間にかかわる移動や運動であったものが、概念化者の部分での、主観的運動(subjective motion)、つまり「メンタル・スキャンニング」によって代替されている。

(4) *Vanessa is sitting across the table from Veronica.*

ラネカーの用語によれば、<通常は話者や聞き手は「主観的に」記述されていて、「舞台から外れている」(offstage)が、それらが I や you などの人称代名詞によって表現されて、言語的にプロファイルされると「客観的に」描写されて「舞台の上」になる>という。しかし、話者、つまり概念化者が「舞台の上」(onstage)に上がろうが、「舞台から外れて」(offstage) しようが、概念化者による「走査」(scanning)は絶えずなされている。

図3の(a)の場合、トラジェクター(tr)とランドマーク(lm)との間の関係は客観的にはっきりしている。(b)では、その関係自体が「希薄化」(Attenuation、あるいはbleaching)しているので、破線で表現されている。(c)では、概念化者の「心的走査」(mental scanning)があるのみであり、その認知的走査(scanning)に対応する客観的基礎が欠けている。とはいえ、トラジェクター(tr)とランドマーク(lm)の間には関係が成立しているが、それを成り立たせているのは、概念化者の認識作用の中に基礎があるからである。言い換えると、その関係は、概念化のプロセスそのものに依存しており、「主観的」に描写されているのである。

つまり、もともと概念化者自身を起点として、そこからメンタル・パスは認識対象たるターゲットへと出て行っていたのだが、そのターゲットがある客観的な位置を起点として運動、ないしは移動を始めると、その運動にとっての起点と終点というペアが生ずる。そのように、一つの時間的なプロセスを認識することは、まず初めの起点をターゲットとしたメンタル・パス(概念化者から発せられるオリジナルな意味でのメンタル・パス。図では、細い破線の矢印)が、終点をターゲットとしたメンタル・パスまで連続的に変化する一連の認識からなっている。そして、その対象の側でのターゲットとしての始点とターゲットとしての終点が、今度の参照点

とターゲットとの関係に転化し、あたかもメンタル・パスが成立したかのような擬似的メンタル・パスが生じる。それは、実際の客観的、あるいは実在的運動が、意識の中で心的なスキミングという形で、パスが表象されるという現象といえるであろう。

ラネカーは、以上のような「主観化」に対して、下記の二つの文を提示して、その第二の意味を解説する⁷。

- (5) a. *Vanessa is sitting across the table from me.*
 b. *Vanessa is sitting across the table.*

まず(5)a であるが、(4)の文とは、Veronica の代わりに、me が入り、話者が参照点として特定されている点が違っている。参照点が潜在的であるか、顕在的であるかの違いは、客観性の度合いによる。顕在的になっている(5)a では、話者が他の人々と同等なものとして自分自身を扱っている、やや距離をとった眺めを示唆している。(5)b では、話者が実際に目の前の状況を見たままに、より近づいて記述している表現である。(5)の二つの文が表現している情景は、写真の中の情景としたらどうだろう。a の方の自分自身を客観視した表現の方が、自然であろう。自己の事態解釈(self-construal)を含む方が、客観性が増す。概念化者である話者が、運動や空間的方位の参照点として onstage になるという記述は、認識主体と発話主体が顕在化するということであるが、しかしそれは逆に客観的描写なのである。私などの人称代名詞が登場してこない場合には、実は主観的な描写であると言える。そこで、(5)を再度書き直すと下記のようなになる。

- (6) a. *Vanessa is sitting across the table.*
 b. *Vanessa is sitting across the table from me.*
 c. *Vanessa is sitting across the table from Veronica.*

そこで、これから現象学の立場から考察してみよう。

(6)で表されるような三つの事態は、概念化者であるSelfが、客観的場面(the objective scene)内にしだいに登場してくるプロセスを段階的に示している。まずaでは、概念化者は潜在的に前提されている表現、bでは、概念化者がonstageになり、

meという一人称的表現により明示的に表現されている例、cでは、そのmeが改めて、三人称的表現によってより客観的に表現されている例であり、これらの三段階が区別されつつ、関連が分析されていた。aからcまでの表現が、Veronicaによって発せられていたと仮定して、現象学的に分析すれば、次のようになる。

まず、(6)aの言明に関しては、<「先反省的」立場からの知覚経験の「主観的」記述>(the “subjective” description of the perceptive experience from the “pre-reflective” standpoint)、つまり、先-反省的な立場で素朴に自分の目の前の現象を素描する記述であり、<私>からの主観的パースペクティブからの記述であるといえる。

次の(6)bの言明は、<「主観主義的」な反省的立場から、知覚経験を「準-客観的」、あるいは「準-主観的」に記述したもの>(the “quasi-objective” or “quasi-subjective” description of the perceptive experience from the “subjectivistic” reflective standpoint)である。meという表現が出ている限り、認識主体自体が顕在的反省の対象になり、しかも言語的に顕在化してきている。それを「主観主義的」反省の立場と名付けでもよいだろう。この記述自体は、客観的とも主観的ともいえない、その意味では、「準-客観的」、ないしは「準-主観的」と特徴づけられうる。

最後の(6)cでは、<「客観主義的」な反省の立場からの知覚経験の「客観的」記述>(the “objective” description of the perceptive experience from the “objectivistic” reflective standpoint)である。認識主観であり、話者であるSelfが、謂わば「三人称化」し、「対象化」した表現である。そして、認識主体が「客観的世界」内に位置づけられている表現であるといえる。

以上の例は、静態的な空間関係においてどのように対象が特定されるかに関わる事象であるが、Groundingの基本的契機として<話者/認識者/概念化者>自体が対象化されているといえる。対象化されているといった場合、単なる知覚者とその知覚作用の遂行主体として同時に潜在的であれ、顕在的であれ、反省作用によって対象化されていることを意味する場合と、その認識主観が、空間的方位の座標軸の原点として無意識的に機能している場合とがある。また、対象化され、言語表現されているのか、それぞれ区別せねばならない。

そもそもある物体が運動している場合、その物体と連関のある一連の事物から成っているひとつの運動系が成立する。そのような運動系自体で、ひとつの座標系となりうる。その運動のベクトルが、前後左右上下などの方向性を定める基準として機能することがある。その意味では、そのような方向性の基準として、認識者の志向性を要請する必要はない。見かけ上であれ、すでに言及したメンタル・パスのような何らかの心的運動が生ずる場合には、それはそれで、擬似的にその運動のベクトル自体が座標を設定するので、客観的な記述が可能であるかのように見えてくる。しかし、あくまでも概念化者の心的な認知走査(mental scanning)が必ず行われていることを、ラネカーは主張している。

一般に、運動系の記述の際には、次の三つの可能性が考えられる。

- (i)ニュートン力学で前提されているような「絶対空間」、「絶対時間」座標として動きを記述する場合。
- (ii)運動系が持っているベクトルが座標軸を展開すると考え、複数の運動系を想定し、その間の相対的關係として対象の位置、ないしは運動の方向性を規定する場合。
- (iii)「認識主観」の位置を絶対的「零点」(Nullpunkt)として考え、I, here, now を基準として対象世界を記述する場合。

以上の三つである。現実的には(i)に関しては、そのような絶対空間の座標軸の原点がどこか特定することは難しいのだが、われわれの生活空間に限って言えば、地球に帰属する相対的方位をあたかも「絶対的方位」であるかのように扱い、限定的ではあるが「絶対的空間」を想定するという手法で行う場合がある。その他には、(ii)と(iii)の方法があるが、(ii)は客観的事象描写になり、(iii)は、主観的描写である。

4. Grounding における across の意味の再度の分析

さて、acrossという前置詞を例に取り、前節で述べたことを確認しよう。
次の例文を見てみよう

- (7) *The child hurried across the street.* (子供が急いで通りを横切って渡った。)
- (8) *The store is across the street from the station.* (その店は、通りを挟んで駅の向かい側にある。)
- (9) *Last night there was a fire across the street.* (昨夜は通りの向こうで火事があった。)

すでに述べたように移動や運動に関しては、必ずベクトルが発生するから起点と矢印がつきまとう。そして、何かがそのような移動によって「横切られる」場合には、その横切る主体と横切られる対象とが生ずる。そして、そのような運動が「横切ること」というプロセスとして認識されるには、概念化者がそれを認識している必要がある。いいかえれば、その物体の運動を認知的に眼差しで追っている、つまり走査(scanning)している必要がある。

この意味でのacrossの例は(7)である。それが、(8)になると、まずは運動、移動という現象が表明上は消えて、静態的な状態を表現しているに過ぎない。しかし、参照点は「駅」(the station)に置かれていて、ランドマーク(lm)はthe streetで、the storeがトラジェクター(tr)ということになる。その場合、(7)では起点に当たるところが、移動現象が表面からは消えているので、(8)では概念化者が設定する参照点として「駅」が機能している。ここまで、(7)(8)では、概念化者自身がonstageになっているわけではない。参照点が概念化者自体を指すSELFにはなっていない。以上の事情をイメージ・スキーマとして表現すると図4になる。(7)に対応しているのが、図4のacrossのイメージ・スキーマであり、(8)に対応している次頁の図4のacross'のイメージ・スキーマである。

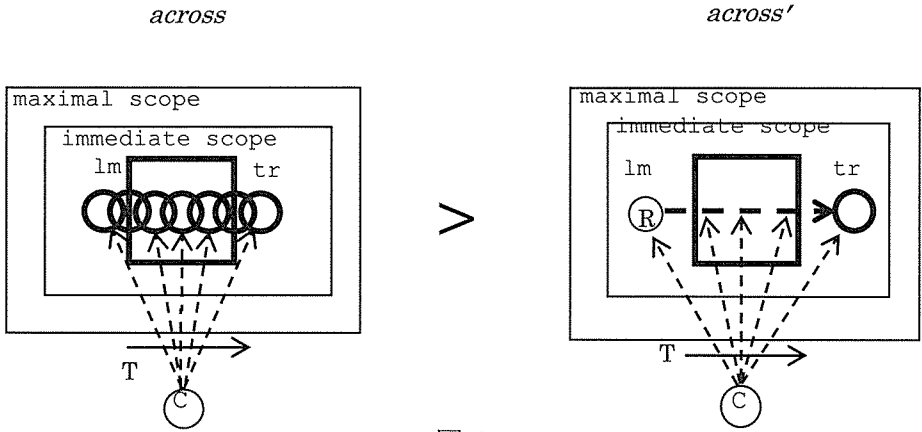


図 4

しかし、(9)のように、物理的運動が必ずしも認識されている必要がなく、概念化者による志向性、言い換えれば心的認知経路(mental path)が、トラジェクターの場所を特定するために参照点から発する「主観的運動/移動」をトレースすることがある。しかも、(9)は、概念化者の視点が参照点になっているので、実際には概念化者Cは参照点Rの位置に来ていることになる。

図4のacrossのスキーマでは(8)の概念化の有するsubjectivityを表現するには不十分といわねばならない。3次元の構造を持つ、次頁の図5のような構造も考えられよう。

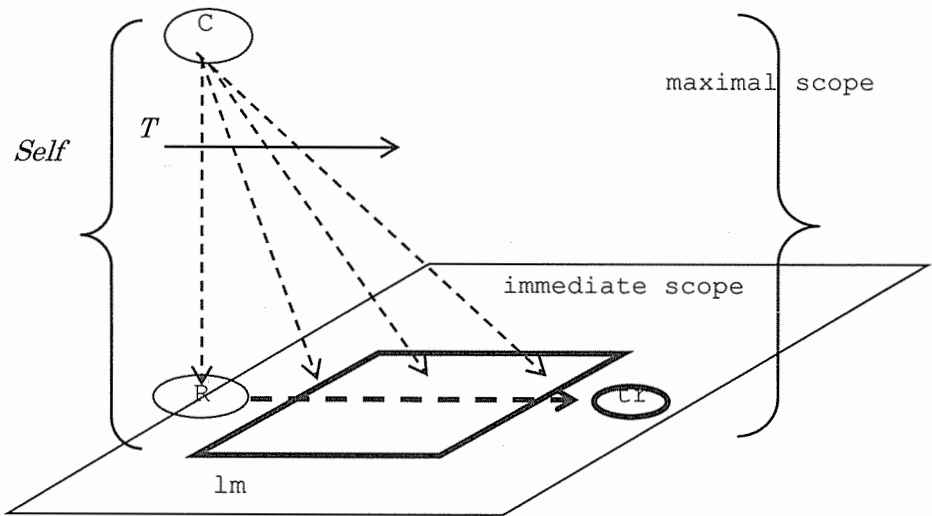


図 5

この図5では、概念化者(C)自体が、3次元の縦方向に展開された「最大スコープ」(maximal scope)内に登場しそれと同時に、2次元的描写では「直接的スコープ」(immediate scope)内では、方向性の起点として参照点(R)の役目を果たしている。概念化者(C)自体が参照点となることで、この概念化のパースペクティブ(perspective)がまったく主観的なものになり、認識者自体から眺められた情景、あるいは配置ということになる。つまり「自我中心的視覚配置」(the egocentric viewing arrangement)内で認識者、ないしは話者の「客観化」(objectification)が起こったわけである。概念化者の視点が記述されるべき対象領域内にGroundingされたということは、その概念化、ないしは記述自体が主観化されたということを意味し、自我中心的(egocentric)に観察されたことを意味する。

さらに立ち入って次のように指摘することができる。

across に関する考察から言えるのは、移動や運動は起点、到達点、あるいは方向という属性を必然的に有するが、心的認知経路(mental path)もその性質上、認識作用(志向性 intentionality)が生じている主体からそれに対して心的認知経路(mental

5. まとめ

本論文での議論をまとめてみよう。

まずわれわれは、「視覚」という認知作用に於いてみられるパースペクティブという構造を手がかりに、事物の空間的配置関係を言語的に表現する、次のような三つの表現の違いを比較した。第一には、〈話し手＝認識主観＝概念化者〉がまったく言及されない場合、第二には、〈話し手＝認識主観＝概念化者〉が一人称の代名詞によって表現されている場合、そして第三には、〈話し手＝認識主観＝概念化者〉が他の事物や人物と同等の存在として客観化されて表現される場合の三つを比較した。そして、それら三つの言語表現の背後には、どのような概念化の違いがあるのかを検討した。次に across という前置詞がもともと表現していた物理的移動にまつわる意味が、だんだんと「意味的に希薄化し」(semantic attenuation)、結局は意識内での「心的パス」を表現するように変化したことを確かめた。

またこの across についての分析を進め、across においては、物理的移動という客観的事象についての言語表現から、「参照点」と「ターゲット」が内面化され、静態的情景の描写でも across が使われ、概念化者の表象の内部に於いては、ひとつの運動がなされるかのような表現が使われることがあることを確認した。認知言語学での独自の用語である「主観化」(subjectification)とは、物理的運動が、現象学で言うところの志向性の上での内面的運動に転化するという現象である。

本論文で行った分析は、まずの認識内容の具体的事例を提示し、英語の例文を使って行った。そうすることでより具体的できめ細かい内容の分析が可能となるというメリットがあった。そして、それぞれの認識内容がどのようにして成立するかという問題に取り組んだ。具体的な方法としては、まず認知言語学者ラネカーが彼独自の用語を使用し、そしてイメージ・スキーマという図でもって提示してくれている「概念化」のプロセスを注意深く検討し、特に「参照点」と「ターゲット」、そして「ランドマーク」と「トラジェクター」という基本的な概念⁸を使用して行った分析を、現象学的な立場から、志向性の働きとして解釈し直した。そして図 5 のように、ラネカーが二次元で組み立てているイメージ・スキーマに対して、「心的な」(mental)な、主観性の次元を 3次元目の座標軸として付け加え、独自に展開してみた。また、現象学で言う「志向性」は、われわれの認知世界の内の「直接的スコープ」という〈地平〉の内部にあるそれぞれの対象に眼差しを向けるという働きを述べているのであり、その意味では、「認識主観」から出発した知覚作用がタ

ーゲットである「認識対象」を認知的に捉えるということの意味しているに過ぎないことも明らかになった。

しかし、そもそも現象学は<志向性の分析>を方法として、われわれの認識作用によってそのつどの認識内容がいかにして成立するかを解明しようとする哲学である。本論文でのわれわれの発想は、<成立している認識内容の具体的提示は、個々の述語文の言語表現によって行う>というものであった。もちろん、言語表現と認識内容自体とは違うだろう。しかし、認知言語学の洞察、つまり<言語表現は概念化の結果である>という原理を受け入れることにより、言語化された限りでの概念化を扱い、それがどのような認知機構を通じて形成されたかを現象学的に分析すると、われわれの個別的な認識内容の分析がより具体的に、そしてより詳細に遂行することができるであろう。本論文では、そのような方法によって「空間的位置の指示」、ないしは運動の方向性の指示という問題を扱い、言語表現における「主観性」の度合いを分析した。

残された問題は、相互主観性の場面での「空間的位置の指示」、ないしは運動の方向性の指示の問題である。そのような相互主観性の世界においては、「視点」(perspective)の交換という現象があるが、そのような現象の分析は今後の課題として残された。

註

- (1) R. W. Langacker, *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 1, Stanford University Press, 1987, pp.128-132.
- (2) R. W. Langacker, "Subjectification", *Cognitive Linguistics* 1-1, 1990, p.6.
- (3) Cf. Bertrand Russell, *An Inquiry into Meaning and Truth*, George Allen and Unwin, 1940, Chapter 7., pp.108-115.
- (4) R. W. Langacker, *Grammar and Conceptualization*, Mouton De Gruyter, 2000, pp.297-306
- (5) ジャンプするという「時間的出来事」が表現されているが、そのような出来事の結果生じた配置関係を表現していると考えられている。アスペクトが perfective ということであろう。
- (6) R.W. Langacker (1990), p.17.
- (7) Ibid., p.20.
- (8) これらの概念に関しては次の文献を参照のこと。
 - ・ 山梨正明、『認知言語学原理』、くろしお出版、2000
 - ・ ロナルド・W・ラネカー、『認知文法論序説』、山梨正明監訳、研究社、2011